政大日本研究【第十六號】
2019 年 1 月，頁 191～209
10.30379/CJJS.201901_(16).0008

《今昔物語集》本朝部異國說話之考察
—以卷三十本朝付雜事〈夫死女人後不嫁他夫語第十三〉為例—

蔡 嘉琪*

中文摘要

《今昔物語集》卷三十本朝付雜事收錄了十四則以和歌為主、圍繞著男女關係的故事。〈夫死女人後不嫁他夫語第十三〉記載一名寡婦，因父母勸其再嫁，故舉雌燕守貞為例而拒絕，終獲父母諒解的故事。

以情節的類似性而言，學界認為本作出自《俊賴髓腦》,《和歌童蒙抄》亦收錄了相同的內容。追溯至中國,《南史》以及《太平廣記》的〈衛敬瑜妻〉正是本作的主軸。《俊賴髓腦》當中將這個故事的來源誤植為《白氏文集》，實際上這個故事並未收於其中。然而《今昔物語集》當中卻未明示出處，將本篇收錄於「本朝付雜事」卷中。意即本篇雖然取自中國題材，卻未收於震旦部，而是本朝部。與中國的作品相較之下，雖然故事內容大抵相同，但仍可見顯著的相異之處。此外值得一提的是《今昔物語集》與《俊賴髓腦》之間的敘述也存在著些許差異。

本文以〈夫死女人後不嫁他夫語第十三〉為主，對照其出處及中國的相關作品，歸納《今昔物語集》當中的特徵，探討其意義所在。

關鍵詞：衛敬瑜妻 再婚 燕 割耳 紅線

* 世新大學日本語文學系助理教授

Investigation of alien setsuwas in Comprehensive Section In Japan by “Konjaku-monogatari-syū” Volume 30 issue 13 - ‘Woman won’t remarry after her husband died’

TSAI, Chia-Chi*

Abstract

In “Konjaku-monogatari-syū” Volume 30, there are 14 stories which about waka and the man-woman relationship. The issue 13-‘Woman won’t remarry after her husband died’, records a widow refused her parent's persuasion of remarriage, by giving an example about the female swallow kept chastity after the death of it’s spouse.

In terms of the plot's similarity, this work is considered to be derived from “Shunrai Zuino”, “Waka Domosho”. ‘Wei Jing Yu's Wife’ which collected by “History of the Southern Dynasties” of China and “Taiping Guangji” are the main axis of it. “Shunrai Zuino” mistakenly took the source of this story as “Bai Zhi Wen Ji”, but actually the story was not included. However, “Konjaku-monogatari-syū” did not record the source of the story, but istead included in Comprehensive Section in Japan. That means, although this work was taken from Chinese subjects, it was not collected in ‘Cathay’, but in ‘Japan’. Compared with Chinese works, although the contents of the stories are mostly the same, significant differences can still be found. In addition, there are some differences between “Konjaku-monogatari-syū” and “Shunrai Zuino”.

This research focuses on ‘Woman won’t remarry after her husband died’, compares the source and other Chinese works. To summarize the characteristics of “Konjaku-monogatari-syū”, and explore its significance.

Key words: ‘Wei Jing Yu's Wife’, remarriage, swallow, cutting ears, marriage red line

* Associate Professor, the Department of Japanese Language and Literature, Shih Hsin University.

『今昔物語集』本朝部における異国話の考察 —巻三十本朝付雑事「夫死女人後不嫁他夫語第十三」を例に—

蔡 嘉琪*

要旨

『今昔物語集』巻三十は、和歌を中心とする十四の男女の仲にまつわる説話から成り立っている。その中の一つである「夫死女人後不嫁他夫語第十三」は、夫に先立たれた寡婦が親に再婚を勧められたが、雌燕を貞操堅固の証として、再婚を拒み、最後に親の諒解を得ることができるという話である。

内容の類似性からいうと、『俊頼髄脳』に基づくと考えられる。また、同話は『和歌童蒙抄』に収録されており、『南史』や『太平広記』にも類話が見られる。「夫死女人後不嫁他夫語」は、中国の「衛敬瑜妻」という物語を軸として展開していくものであるが、『俊頼髄脳』では誤って『白氏文集』によると述べられている。一方、『今昔物語集』においては、出所を触れずに、「本朝付雑事」に配置されている。つまり、中国の話でありながら、震旦部ではなく、本朝部に収録されているのである。それに、話の梗概は一致しているが、中国の類話と照らし合わせてみれば、『俊頼髄脳』や『今昔物語集』に目立つ異同が存在している。しかも、『今昔物語集』と『俊頼髄脳』の間にも相違点が見られることから、単なる忠実に受け継いだものとは思えない。

小稿は「夫死女人後不嫁他夫語第十三」を中心に、出典や震旦側の関連作品と比べ、『今昔物語集』にのみ存在する要素を取り上げて、その意味を分析してみたい。

キーワード：衛敬瑜妻 再婚 燕 耳を切る 赤い糸

* 世新大学日本語文学科助理教授

『今昔物語集』本朝部における異国話の考察
—巻三十本朝付雑事「夫死女人後不嫁他夫語第十三」を例に—

蔡 嘉琪

1. はじめに

『今昔物語集』（以下『今昔』）巻三十は、和歌を中心とする十四の男女の愛、あるいは夫婦の仲にまつわる説話から成り立っている。その中の一つである「夫死女人後不嫁他夫語第十三」は、夫に先立たれた寡婦が親に再婚を勧められたが、雌燕を貞操堅固の例証とし、再婚を拒み続け、最後に親の諒解を得ることができるという話である。

先行研究によると、この作品は、中国の「衛敬瑜妻」を底本として展開するものと考えられている。直接に依拠するではなく、『俊頼髄脳』[1]が出典だと指摘されており、また、『和歌童蒙抄』[2]にも同話が収録されている。底本と看做される「衛敬瑜妻」は、『南史』[3]や『太平広記』[4]に見られるものである。それをもとに敷衍する作品も数多く存在している。『俊頼髄脳』では、この話が『白氏文集』から取ったと出所の情報が補足されている。しかし、実際のところには、この話は『白氏文集』に収録されていない。一方、『今昔』において、出所は全く触れられず、本朝部に配置されている。つまり、中国の話であるにもかかわらず、「夫死女人後不嫁他夫語」は、震旦部では

[1] 『今昔』と『俊頼髄脳』の関係について、『今昔』の研究史において長い間論じられた議題である。『今昔』は『俊頼髄脳』を粉本とする直接の交渉関係が認められるという意見もあるが、否定説もある。いずれにせよ、『俊頼髄脳』は『今昔』の編纂、特に震旦部の巻十、本朝部巻十一、二十四、三十、三十一にとって、重要な資料とされることが定説となっている（片寄正義『今昔物語集の研究下』p.446）。

[2] 藤原範兼著。12 世紀中頃成立した歌学書。

[3] 『南史』は南北朝の南朝を扱う正史である。唐の高宗（649-683）の時に李延寿によって完成された。全八十巻ある。

[4] 『太平広記』巻第二百七十婦人一「衛敬瑜妻」。

なく、巻三十「本朝付雑事」に収められているのである。

そして、「夫死女人後不嫁他夫語」を、「衛敬瑜妻」をはじめとする中国の類話と照らし合わせてみると、梗概は一致しているものの、やはりさまざまな点で異同があることがわかる。そのため、これは単に『俊頼髄脳』を忠実に受け継ぐというより、『今昔』の編者の加筆により、「衛敬瑜妻」及び『俊頼髄脳』とは一味違う作品にしようとする意図があると考えるべきなのではないだろうか。

小稿では巻三十「本朝付雑事」「夫死女人後不嫁他夫語第十三」を中心に、出典や震旦側の関連作品と対照し、『今昔物語集』にのみ存在する要素を取り上げ、その意味を分析していきたい。

2. 日中における関連作品

「夫死女人後不嫁他夫語第十三」の出典は『俊頼髄脳』で、『和歌童蒙抄』第八「鳥部」の「鸞」に同話であると指摘されている（『今昔』四「出典・関連資料一覧」、p.604）。さらに、中国の関連資料や類話については、『南史』七十四、『太平広記』二百七十が取り上げられている。ほかにも、明の小説家馮夢竜の『情史類略』にも同話が収録されている。前述したように、「衛敬瑜妻」に語られる燕の話を踏まえて展開していく作品はかなりの数に上る。例を挙げてみれば、元の散曲作家張可久の「塞鴻秋・春情」という主題の作品に詠まれた「傷心燕足留紅線」の一句は、「衛敬瑜妻」を踏襲してきたものだと看做されている。

主人公である衛敬瑜の妻は、南北朝時代梁の覇城の出身で、娼家の出とも言われる実在する人物である。王整の妹で、王玉京といい、一説は母方の姚姓を名乗って、姚玉京という記述も残されている（『情史類略』、p.6）。玉京が夫婦の仲を思い出して詠む「連理詩」や「孤燕詩」は、『南史』と『太平広記』に記されている。以下、「夫死女人後不嫁他夫語」を中心に、中国と日本において、「衛敬瑜妻」にかかわる作品と比較して、その間の異同を考察する。

3. 再婚のススメ

玉京は襄州の役人衛敬瑜に嫁ぎ、十六になった年に、夫が溺死した[5]。若くして寡婦になった玉京の頼れる人がいないため、「父母舅姑咸欲嫁之」と「衛敬瑜妻」に述べられるように、実家の両親のみならず、嫁いだ家の舅姑も再婚を勧める。『俊頼髄脳』及び『今昔』では、父に再婚を勧められた主人公が再婚しない決意を母に伝える。再婚を拒む理由については、『南史』と『太平広記』など中国側の作品では一切触れていない。一方、『俊頼髄脳』及び『今昔』では、夫と長く連れ添っていられる「宿世」がないと述べている[6]。それを聞いて驚いた母が父に告げると、今度は父が年だという理由で、娘の将来を心配し、再婚の話を再び持ち出す。それに対して、娘は燕のことを話題にし、自分の固い意志を述べ、再婚を拒否するのである。

このように、再婚の話を持ち出したのは、「衛敬瑜妻」では両家の親である。すなわち、嫁いだ家の親も玉京のことを憐れに思い、再婚させようとしている。それに比べて、『俊頼髄脳』と『今昔』では「娘」に新しい「婿」、あるいは「夫」を会わせる娘思いの両親の立場から物語が描かれている。『今昔』では「我レ年既ニ老ヒタリ。事近キニ有リ。」とし（p.472）、『俊頼髄脳』では「我死なむこと、近きにあり。」としている（p.142）。しかも、父は自分が年だから、これから長いことはないと主人公にプレッシャーをかけ、断りづらい立場に立たせるのである。

では、親の度重なる勧めに対し、主人公はどのような行動を取るのだろうか。「衛敬瑜妻」では「截耳置盤中爲誓乃止」、つまり耳を切り、皿に載せるという過激な行為を通し、自分の意志を表し、両

---

[5] 『南史』及び『太平広記』では、「年十六而敬瑜亡」としか記されていない。『情史類略』、（『情史』、または『情天寶鑒』とも呼ばれる）の記述によると。「一説，姚玉京嫁襄州小吏衛敬瑜。衛溺死，玉京守志。」と夫の死因が示される。

[6] 「宿世」を理由に再婚を断わるところは、『今昔』のみでならず、『俊頼髄脳』にも同様の叙述が見られる。片寄氏によると、巻三十の特徴として、「運命観の強調」が取り上げられる。一方、前田雅之氏はそれを「仏法的因果観」でまとめている。片寄正義『今昔物語集論』pp.372-373、前田雅之『今昔物語集の世界構想』pp.337-338 参照。

家の親に自分の再婚を諦めさせることを果たしたのである。ところが、『今昔』では全く異なる行動に移す。

> 娘父母ニ云ク、「然ラバ、此ノ家ニ巣ヲ作テ、子ヲ産メル鷰有リ。雄鷰ヲ相具セリ。其ノ雄鷰ヲ取テ殺シテ、雌鷰ニ注シヲ付テ放チ給へ。然テ明ケム年其ノ雌鷰、他ノ雄鷰ヲ具シテ来タラム時ニ、其レヲ見テ我レニ夫ヲバ合セ給へ。畜生ソラ夫ヲ失ヒツレバ、他ノ夫ヲ儲クル事無シ。況ヤ人ハ畜生ヨリモ心可有シ」ト（p.472）。

これによって、視点を変え、話題を燕に移すことができる。家に巣を作って子を産んだ燕がいるので、その雄燕を殺し、雌燕に印をつけてから放す。自分の運命はすべて来年の春に戻ってくる雌燕に任せるという提案を持ちかける。

「殺戮無辜、爰始淫為劓、刵、椓、黥。」（『書経・呂刑』）とあるように、中国では、古来「刵」という耳を切り取る刑罰が行われてきた。一方、自ら耳を切るという行動は中国では、性別によって意味付けが異なっている。男性は無実を主張するのに対し、女性は主に志操を表すのである。『晋書・張軌伝』では、「治中楊澹馳詣長安，割耳盤上，訴軌之被誣，模乃表停之」と描かれている（p.1464）。楊澹は耳を切って皿に載せ、張軌の無実を訴えるという用例がある。ところが、女性が同様の行為をした場合、体の一部を傷つけることにより、男尊女卑の社会における最大の反発として捉えられているのである。衛敬瑜妻と同様の境遇になり、十六で夫を失った魏溥の妻房氏は、夫の葬式に「操刀割耳，投之棺中」（『魏書』巻九十二列伝列女第八十、pp.981-982）という強硬手段を通じて再婚しない決意を表す。その他、曹文叔の妻夏侯氏は若くして夫を亡くし、「断髪以為信」をはじめ、「以刀截兩耳」、「以刀断鼻」など、ますますエスカレートして、激しい行動に移り、再婚しない意を表す（『三国志』魏書九諸夏侯曹伝第九）。先行研究によると、再婚を迫られた女性は断りたい気持ちで、自分で命を絶とうとしても、残りの家族の世話を

しなければならない事情も含めて考えたうえで、やむを得ずこのような極端な手段を選ぶ人が少なくないという[7]。

以上述べてきた中国の列女とは異なり、『今昔』と『俊頼髄脳』では、話の流れに従い、今度は燕を検証することになる。ただ、その検証の前に、燕に関する仮説を立て、次のような道理が述べられる。「畜生ソラ夫ヲ失ヒツレバ、他ノ夫ヲ儲クル事無シ。況ヤ人ハ畜生ヨリモ心可有シ」(p.472)。片寄正義はこれについて、「今昔の撰者の熾烈なる教訓主義」による加筆であり、特に「情ある心を禮讃し、情趣を解する心を持つべきことを教えている」とし、さらに、撰者の「温かな情心」が読み取れると評価している(『今昔物語集論』pp.360-361、pp.372-373)。

これまで再婚を説得する理由、主人公が取る行動、編者の評語など、再婚の勧めにかかわる部分を検証してきた。以下は燕を中心に、話の導入、及びその検証の手順をめぐり、引き続き考察を進めていきたい。

4. ツバメをめぐる言説

『説文解字』では「燕、玄鳥也。籥口、布翅、枝尾。」と外見の特徴が説明されているが、古典文学におけるツバメは、様々な意味を持つ象徴となっている。まず季節の変わり目、すなわち春の到来を伝える鳥として知られている。この例は枚挙にいとまがなく、白居易の「錢塘湖春行」で「幾処早鶯爭暖樹，誰家新燕啄春泥。」が詠まれており(p.103)、「鶯」と「燕」を春の代弁者とされている。そして、杜甫もよく「燕」を借りて春の到来を表現している。「泥融飛燕子、沙暖睡鴛鴦。」(「絶句」、p.321)、「細雨魚兒出、微風燕子斜。」(「水檻遣心」、p.263)などの例が挙げられる。晏殊「破陣子・春景」では「燕子來時新社」と詠まれており、立春の後行われる「新社」の頃になると、燕がやって来るという意味が含まれている(『晏殊晏

[7] 張欣怡「從婦女的守節与再嫁看魏晋南北朝的貞節観」pp.169-195 を参照。

幾道詞選』、p.71)。

また、文学作品には美しい女性を燕に喩える際、常に鶯と合わせて用いられる。「燕燕軽盈、鶯鶯嬌軟。」はその中の一例である（姜夔「踏莎行」)。なお、つがいで出入りしていることから、仲睦まじい夫婦になぞらえられもする。これについては、「落花人獨立、微雨燕双飛。」（翁宏「春殘」『全唐詩』22、p.8656)、「盧家少婦鬱金堂、海燕双棲玳瑁梁。」（沈佺期「古意」『歴代詩選注』、p.286）などの用例、また「生憎帳額繡孤鸞、好取門簾帖双燕。双燕双飛繞畫梁、羅帷翠被鬱金香。」（盧照鄰「長安古意」『全唐詩』2、p.519)、「双燕來時還念遠。珠簾繡戸楊花満。」（晏殊「蝶戀花」『二晏詞箋注』、p.292）などの作品にも同じような意味で使われている。

日本では、ツバメは「つばくらめ」、「つばくら」、「つばくろ」と呼ばれている。『和歌童蒙抄』第八鳥部に、「鷰」という漢字に当て、そして『万葉集』に大伴家持の「燕来る」という歌と、『南史』「衛敬瑜妻」が取り上げられて説明されている。この『万葉集』の「燕来る」の歌を引用すると、次のとおりである。

燕来る 時になりぬと 雁がねは 本郷思ひつつ 雲隠り鳴く

（大伴家持『万葉集』巻 19-4144、p.321）

だが、『俊頼髄脳』及び『和歌童蒙抄』に収録されている歌の下の句に異同が生じる。

つばめくる時になりぬと雁がねはふるさと恋ひて雲隠れ鳴く（『俊頼髄脳』、p.143）[8]

つばめくるときになりぬとからがねはふるさとこひてくもがくれゆく（『和歌童蒙抄』、p.126）

部分的に差異が見られるが、人と人がすれ違いで遠く隔てられているという主旨は同様である。これは西漢劉安の『淮南子』地形訓の

[8] 下線はすべて筆者による。

「燕雁代飛」から取ったと思われる[9]。ここでは、本来は春になって雁が北へ渡る時期には、燕が雁に代わって南から飛んでくる。そして、秋になったら、燕が南に去り、燕に代わって雁が北から飛んでくる、という禽鳥の習性が述べられている。そこから転じて、人がお互いに異なる方向に去っていき、遠く隔たってしまうことを指す。それに、人間関係におけるすれ違いによる隔たりができてしまうことを喩えるようになる。この『和歌童蒙抄』及び『俊頼髄脳』ともに引用される和歌が、『今昔』には見当たらない原因については、検討に値するだろう。それは「夫死女人後不嫁他夫語第十三」に当たって、『今昔』と『俊頼髄脳』との交渉関係を否定する証拠として認められることは難しいが、『今昔』では強調したい「節操」という主旨にあまりにも不相応の内容なので、焦点をぼかさないように、あえてこの歌を取らないのではないか。

そして、ツバメを貞節を守る女性に例える代表的な用例こそが、本稿の主眼となる「衛敬瑜妻」である。ツバメにかかわる記述を以下に引用したい。

> 所住戸有鷰巣、常双飛來去、後忽孤飛。女感其偏栖、乃以縷繫脚爲誌。後歳此鷰果復更來、猶帯前縷。女復爲詩曰：
> 「昔年無偶去、今春猶独帰。故人恩既重、不忍復双飛。」
> （『南史』、p.848）

かつて、つがいで飛び回っていた燕が、ある時点から一羽になってしまった。敬瑜妻は、雄の燕に死なれた雌が残されると推測し、それを確かめるために、印として燕の足に紐を結んでおく。翌年になると、印の付いた一羽の燕が戻ってくることになる。そこで、妻が燕の志操を称え、「孤燕詩」を詠むのである。

この内容は『俊頼髄脳』をはじめ、『今昔』、『和歌童蒙抄』などに取り入れており、これによって日本文学では、当初は季節の象徴とされていた燕が、中国文学を受容し、次第に女性の節操を表す象徴

[9] 劉安の『淮南子』地形訓に「磁石上飛，雲母来水，土龍致雨，燕雁代飛」という内容が見られる。

となっていくのである。

そこで、「衛敬瑜妻」の内容を『今昔』と『俊頼髄脳』に照らし合わせ、ツバメにかかわる著しい異同を二つ取り上げ、さらに考察を続けていこうと思う。

4.1.雄燕の運命

まず、「衛敬瑜妻」と異なり、『今昔』と『俊頼髄脳』では、雄燕は全く違う運命を迎えることになっている。以上引用されたように、残された雌燕と偶然境遇が重なった衛敬瑜妻の予言されたとおり、翌年一羽の燕が戻って来る。十二世紀宋の時代に編集された『古今事文類聚』[10]では、「燕女墳」という物語が収録されている。該当箇所は次のようになる。「一日為鷙鳥所獲、其一孤飛悲鳴徘徊。」と、雄の燕が鷙鳥という猛禽に噛み殺され、残された雌は雄の死骸の周囲を飛び回り、悲しそうに鳴いていた姿が描かれている（p.700）。「衛敬瑜妻」で触れていない雄燕の死因については、弱肉強食という理由がつけられている。

では、この部分に関して、『今昔』と『俊頼髄脳』はどのように述べているのだろう。該当部分を以下に引用する。

> 父母、「現ニ然モ有ル事」トテ、其ノ家ニ巣ヲ咋テ子ヲ産タル鷰ヲ取テ、雄鷰ヲ殺シテ、雌燕ニハ頸ニ赤キ糸ヲ付テ放ツ。然テ明ル年ノ春、鷰ヲ待ツニ、其ノ雌鷰他ノ雄鷰ヲ不具ズシテ、頸ニ糸ハ付乍ラ来レリ。巣ヲ咋テ子ヲ産ム事無クシテ飛ビ去ヌ（『今昔』、pp.472-473）。
>
> （父母）げにもと思ひて、家に、こ生みたる、つばくらめを取りて、男つばくらめをば、殺して、女つばくらめには、首に、赤き糸を、付けて放ち、つばくらめ帰りて、またの年の春、男も具せで、ひとり、首の糸ばかり付きて、まうで来たれば、（以下略）（『俊頼髄脳』、p.143）。

[10] 宋の祝穆が編集した類書。1246 年に成立。「燕女墳」は巻四十五に収録されている。

娘に言われたとおりに、親は人為的に雄燕を殺すのである。だが、本当のところ親はやはり娘に再婚させようと思いながらも、半信半疑でそうしたのではないか。この部分に着目すれば、娘の志操というより、幸せになってほしいという親の愛情がしみじみと感じられよう。

4.2.印の赤い糸

『今昔』と『俊頼髄脳』では、親が雄燕を殺してから、雌燕の首に印をつけることになっている。

> 雄鷰ヲ殺シテ、雌燕ニハ頸ニ赤キ糸ヲ付テ放ツ。(『今昔』、p.472)。
>
> 男つばくらめをば、殺して、女つばくらめには、首に、赤き糸を、付けてはなち（『俊頼髄脳』、p.143)。

雌燕の首に赤い糸をつけたまま放すのである。この部分に関して、『南史』では「女感其偏栖，乃以縷繫脚爲誌。」と、主人公は残りの一羽が雄燕に死なされたと推定し、足に「縷」、いわゆる「いとすじ」[11]をつけると述べられている。ほかにも特別な識別方法が描かれており、例えば「燕賦並序」[12]の中では、別の方法を用いて判明する。「有言燕今年巣在此。明歳故復来者、其將逝、剪爪識之、其後果至焉。」と指を切るという独特な用例も見られている。

『南史』では、主人公が動物の習性を見て、感慨深さを感じる。それに比べ、『俊頼髄脳』及び『今昔』において、雌燕にそうさせずにいられない情況をつくる行動力の高い主人公、より正確に言えば、この主人公の言いなりになる親がいる。『俊頼髄脳』及び『今昔』に触れた赤い糸といえば、因縁を連想させる運命の赤い糸とも言われている。『定婚店』という作品は、夫婦になる男女の足に赤い縄でつなぎあわせる婚姻を司る「月下老人」の話である[13]。「糸」に繋がれる男女の話は『古事記』にも一話ある。活玉依毘賣が毎晩通ってい

[11] 大漢和巻八「縷」条を参照。
[12] 晋の傅咸の作、『全晋文』に収録されている。
[13] 唐李復言の『続幽怪録』に初出され、『太平広記』巻第一百五十九定数十四に収録されている。

る男の正体を知るため、麻糸を針に通し、針をその男の衣の裾に通した。翌朝、「従糸尋行者」と糸を沿い男の居場所を尋ねてみると、大物主神であることが分かった。「糸」の要素のみが共通しているが、知恵を強調している三輪伝説から、燕の首に結んだ赤い糸とは縁遠いようである。

上記のことから、中国の関連作品と比べると、『今昔』及び『俊頼髄脳』において、雄燕の殺しと雌燕の首に赤い糸という二つの部分に異同があることは明らかとなる。ここから見れば、『今昔』と『俊頼髄脳』とは同一系統の話であることが示唆されていると言えるだろう。これらは、「衛敬瑜妻」と異なり、雄燕を殺したことから、娘に対する親の愛情を読み取ることができる。さらに、雌燕の首に赤い糸をつけることは、月下老人が夫婦になる男女の足に赤い縄でつなぎあわせることを連想させ、娘の再婚を期待している両親の姿が浮き彫りになる。

5.『今昔』と『俊頼髄脳』との間

『今昔』は『俊頼髄脳』の間の継承関係は、これまで長年にわたり議論されてきた。前述したように、『俊頼髄脳』と『今昔』は同一系統の話と看做すことができるが、両話の間に違いがあることは否めない。以下、その異同を取り上げて論じたい。

5.1.情報の不透明さ

『今昔』は、説話の事実性を高めようとして、時代、人名、地名など、具体的な情報を掲げてから、説話に入るという流れとなっている[14]。巻三十に収録される十四の話において、第十三話を除き、人名、官職名、出身地など作中人物にかかわる情報、ないしは事件発

[14] 冒頭部に時代と人名を示してから、その人物についての説明を加え、それから説話を述べるという流れは、今昔物語集の編者の常套手段であると指摘されている。そして、このような冒頭部の詳細化、具体化という操作は、説話の事実性を高めるためと考えられる。片寄正義『今昔物語集の研究下』p.448、川上知里「『今昔物語集』各話冒頭部の意義」pp.37-38。

生の場について示される形となっているのである。第十三話の冒頭部はというと、「今昔、□□ノ国□□ノ郡ニ住ケル人祖有テ、娘ニ夫ヲ合セタリケルニ、其ノ夫失ニケレバ、祖亦他ノ夫ヲ合セムト為ルニ、(以下略)」となる(p.471)。引用したように、第十三話はあえて主人公の人名を明かしておらず、これは『俊頼髄脳』に一致している[15]。仮に『俊頼髄脳』と『今昔』の間に継承関係があるとすれば、これは依拠資料の『俊頼髄脳』にもともと示されていないうえに、ほかに参考できる資料もないため、たとえ編者が詳細な情報を提示しようとしても手の施しようがないと考えてよいだろう。さらに国名、郡名などの固有名詞までも意識的に欠落している[16]。詳しい情報を提供する本意と裏腹、巻三十におけるもっとも情報の少ない作品となっているのである。

それにくわえて、『俊頼髄脳』では、話の終わりに「つばくらめ、男ふたりせずといふこと、文集の文なりとぞ。」と述べられており、『白氏文集』によった出自が示されている(p.143)。実際には、「衛敬瑜妻」は『南史』と『太平広記』には収録されているものの、『白氏文集』には見られない。だが、典拠にかかわる記述は『今昔』に受け継がれていない。それは編者が、出典を考察して用いらずにいたと証明できるとは限らないが、少なくとも震旦の色を薄めようとした意識は伺えよう。以上のように何も示されていないことは、かえって震旦の要素を薄め、様々な情報を提供しようとすることにより、始めから本朝部に配置する意識を読み取ってもいいのではないだろうか。

5.2.主人公への視点

「むかし、男ありけり。女に、男あはせたりけるが、失せにけれ

[15] 『俊頼髄脳』の該当部分を引用すると、「むかし、男ありけり。女に、男あはせたりけるが、失せにければ、(以下略)。」となっており、人名を明かしていないことになっている(p.142)。

[16] 小峯和明が『今昔物語集』における意識的な空白こそは文字よりものを語っているという。そこから、編者の「強固な意志」、「編成の苦渋」がにじみ出ているようにうかがえる。「形成と未成—埋もれた巨編」『今昔物語集を読む』pp.1-9、「今昔物語集の世界」『今昔物語集を学ぶ人のために』pp.4-14。

ば、また、異人に、婿とらむとしけるを」（以下略）と『俊頼髄脳』はこのように語り始める（p.142）。『今昔』の冒頭部を引用すると、次のようになる。「今昔、□□ノ国□□ノ郡ニ住ケル人祖有テ、娘ニ夫ヲ合セタリケルニ、其ノ夫失ニケレバ、祖亦他ノ夫ヲ合セムト為ルニ、（以下略）」（p.471）。両作とも親の立場から述べているが、「男」の部分を「祖」に換え、冒頭部から親子関係に着目する姿勢が明らかになる。

そして、中国の「衛敬瑜妻」という題名から、「衛敬瑜」という人の妻のみ示されているが、彼女が一体何をしたのか、内容を読まなければ当然知る由もない。『俊頼髄脳』では題名をつけることなく、和歌から物語を導入している。一方『今昔』では、表題名「夫死女人後不嫁他夫語」に示されるとおり、女を主役に、夫を亡されてもほかの男に会わないという主旨が如実に提示されている。

以上述べてきたように、『今昔』では志操の高い女を表題名に示しており、そこから話の主旨が明確に伝わるようになっている。また、冒頭部の表現から、親子をめぐる出来事、ならびにその絆を強調する意識が伺える。

5.3.主旨の転移

「衛敬瑜妻」は貞操堅固の女子を中心に描いているが、日本に伝わった後、『俊頼髄脳』の話では主旨が異なっている。

> むかしの、女の心は、今様の、女の心には、似ざりけるにや。つばくらめ、男ふたりせずといふこと、文集の文なりとぞ（p.143）。

近頃の女とは昔の女とは全然違う、昔の女の心は清らかであったとして、近頃の女性の貞潔観が指摘されている。さらに、『俊頼髄脳』ではこうした表現は見られず、逆に『今昔』で何度も強調される表現がある。それは、娘が親に燕のことを検証すると提案する際、補足されたものである。「『畜生ソラ夫ヲ失ヒツレバ、他ノ夫ヲ儲クル事無シ。況ヤ人ハ畜生ヨリモ心可有シ』ト」となる（p.472）。翌年、

赤い糸をつけられた雌燕が帰ってくると、「巣ヲ咋テ子ヲ産ム事無クシテ飛ビ去ヌ」と述べている。さらに、話末評語も同じことを繰り返している。

> 此レヲ思フニ、昔ノ女ノ心ハ此ナム有ケル。近来ノ女ニハ不似ザリケルニコソ。鷰メモ亦他ノ雄無ケレバ、子ハ不産ネドモ、家ニ来リケウコソ哀ナレ、トナム語リ伝ヘタルトヤ（p.473）。

ここでは『俊頼髄脳』と同じように近頃の女性への教訓が見られる。そのうえで、「それは例の雌燕が子を産まず、別の雄も持たなかったことである。」という一言つけ加えてから話をしめくくる。編者が主人公の節操を褒めつつ、読者の好奇心を満たすため、燕にまつわる情報を補足しているのである。

『情史類略』によると、玉京が亡くなってから雌燕も毎年戻ってきており、家を回って悲鳴をあげているということである。玉京が南郭に葬られたことを家族に伝えられ、燕がそこへ向かい、墓の前で死んでしまうのである。そして、玉京と燕の姿が灞水というところに見られると言われている。しかし、これは後の時代に成立した作品なので、『俊頼髄脳』や『今昔』に取り入れられるわけはない。『今昔』ではあの後、燕の様子が話末評で改めて補足されている。それは読者の好奇心を満たす役割があるのみならず、「現実味が乏しい」話の信憑性を高める効果も考えられよう[17]。

6. おわりに

『南史』「衛敬瑜妻」は中国において、燕を取り上げ、節操の高い女性を喩える作品として知られている。そして、日本では、貞節を守る女性の象徴として「衛敬瑜妻」が『俊頼髄脳』、『今昔』、『和歌童蒙抄』に収録されている。さらに、『俊頼髄脳』と『今昔』では、筋書きを変えずに加筆された作品が見られる。例えば、「截耳」とい

[17] 前の諸巻に比べ、巻三十、特に第十一、十二、十三の各話は現実味が乏しくなっていることが指摘されている。片寄正義『今昔物語集論』、pp.372-373。

う極端な行為の代わりに、人為的に雄燕を殺し、雌が再び雄を持つかどうかを検証するといったものである。なお、雌燕に印を付けるには足に「縷」をしばるのではなく、結婚を連想させる赤い糸を首にまいている。上記のことから、『俊頼髄脳』と『今昔』では夫婦の仲のみならず、娘の再婚を期待してやまない両親の愛情が伝わるのである。

一方、『俊頼髄脳』と対照すると、『今昔』では、出典を示さないことから、震旦の要素を薄めようとする編集意識は明らかである。また、冒頭部に存在する欠字はすべて主人公にかかわる情報である。それは説話の事実性を高める意図による所為と考えられる。両作品の比較により、「夫死女人後不嫁他夫語第十三」は、震旦部ではなく、最初から本朝部に配置する編集意識が浮かび上がってくる。

なお、表題名及び冒頭部の表現から、志操の高い女を褒め称える主旨のほかに、親子関係を重視する姿勢が推察されよう。それに、『今昔』では主人公の節操に集中して語っているにもかかわらず、燕にまつわる情報も数多く提供されている。それを通して、読者を引き付けたり、現実味を増す効果をもたらしている。中国の「衛敬瑜妻」において、感性豊かで、意志の固い主人公であるが、どこか消極的な女性という印象が見受けられる。だが、『俊頼髄脳』と『今昔』での加筆により、宿命には逆らえないが、知恵の高くて積極的な女性像に変化しているのである。

【付記】本稿は、2018 年和漢比較文学会第 11 回特別例会（2018 年 8 月 30 日）において、「『今昔物語集』本朝部における異国話の考察—巻三十本朝付雑事「夫死女人後不嫁他夫語第十三」を例に—」と題して、口頭発表に加筆修正したものである。発表の際、貴重な御指摘・御教示を賜った先生方に篤く御礼申し上げます。

テキスト

馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳（2002）『今昔物語集 4』（新編日本古典文学全集 38）、東京：小学館

橋本不美男、有吉保校注・訳（2002）『歌論集』（新編日本古典文学全集 87）、東京：小学館

李延寿（1962）『南史』（二十五史 19）、台北：芸文印書館

参考文献

晏殊・晏幾道撰、張草紉箋注（2008）『二晏詞箋注』、上海：上海古籍出版社

晏殊・晏幾道撰、陳永正選注（2000）『晏殊晏幾道詞選』、台北：遠流

片寄正義（1974）『今昔物語集の研究』下、神奈川：芸林舎

片寄正義（1974）『今昔物語集論』、神奈川：芸林舎

川上知里（2011）「『今昔物語集』各話冒頭部の意義」『国語と国文学』2 月号、東京：東京大学国語国文学会、pp.36-53

魏收（1972）『魏書』二（二十五史 15）、台北：芸文印書館

厳可均（1999）『全晋文』上、北京：商務印書館

阮元（1997）『尚書正義』（十三経注疏）、台北：芸文印書館

祝穆（1992）『古今事文類聚』二、上海：上海古籍出版社

張欣怡（2004）「從婦女的守節与再嫁看魏晋南北朝的貞節観」『中正歴史学刊』民国 93 年第 7 期、pp.169-195

陳寿（1959）『三国志』、北京：中華書局

鄭文恵等選注（2004）『歴代詩選注』、台北：里仁書局

杜甫、張淑瓊編（2003）『杜甫』下（中国文学総新賞唐詩新賞 7）、台北：地球出版社

白居易、張淑瓊編（2003）『白居易』（中国文学総新賞唐詩新賞 11）、台北：地球出版社

馮夢竜（1985）国立政治大学古典小説研究中心主編、明清善本小説叢刊初編『情史類略』、台北：天一出版社

房玄齢等撰、呉士鑑・劉承幹同注（1962）『晋書斠注』二（二十五史9）、台北：芸文印書館

彭定求等編（1996）『全唐詩』、北京：中華書局

前田雅之（1999）『今昔物語集の世界構想』、東京：笠間書院

室松岩雄編（1908-1910）『和歌童蒙抄』（国文注釈全書 2）、東京：国学院大学出版部

諸橋轍次撰（1968）『大漢和辞典』、東京：大修館

李昉等編（1961）『太平広記』、北京：中華書局

ウェブサイト

http://base1.nijl.ac.jp.rpa.shu.edu.tw:2048/~nkbthdb/日本古典文学大系本文データベース：『古事記』（accessed2018.06.03）

http://base1.nijl.ac.jp.rpa.shu.edu.tw:2048/~nkbthdb/日本古典文学大系本文データベース：『万葉集』（accessed2018.06.05）

https://ctext.org/shuo-wen-jie-zi/zh 中國哲学書電子化計劃：『説文解字』（accessed2018.06.04）